

『琉球国由来記』に記された「宮鳥御嶽」の構造と変化

大田 静 男

OHTA Shizuo

石垣市立博物館協議会会長

【要旨】『琉球国由来記』の宮鳥屋御嶽の由来や、現在の構造を通して、沖縄・八重山の御嶽の創建、変遷を描きたい。八重山では現在も地域によっては御嶽や神について語ることはタブー視され、また、ひとびとには絶えず畏怖がつきまとう。神の正体を知る（暴く）ことは地域によっては暴力沙汰にさえ発展した。そのため、御嶽の研究は宗教や民俗、祭祀の面からの研究が多いが、それも、核心の部分には触れない（触れられない）状態が続いていた。

しかし、先学は困難な中で研究に励み、それなりの学問的成果や蓄積を残している。

沖縄返還前後の大干ばつで、過疎化がすすみ、また、新興宗教の浸透によって御嶽に対する観念が大きく変わった。しかし、それは今に始まったことではない。宮鳥御嶽の聖域を、学校建設や忠魂碑建立のために村民自らが提供したものである。御嶽の木を折ったり傷つけたり、持ち帰ってはならないという教えは、廃藩置県後の人々の意識の中ですでに変化が起き、消え去っていたのである。しかし、都市化のなかで今、記録や研究をしなければという危機感が畏怖を抱えながら突き動かした。

宮鳥御嶽は石垣市の中心部に在り、同御嶽を中心に集落が形成され発展し、市街地である4か村を誕生させた。同御嶽の由来や御嶽の構造をひとつひとつ取り上げて、検討すれば、御嶽成立がそれには、宗教、民俗だけでなく特に、歴史や考古学を援用しながら見いだせるのではないかとの思いから取り組んだ。

『琉球国由来記』に描かれている、神出現の時間、寅の日という暦の問題、鳥居にしても、イビの前という結界がありながらなぜ、新たな鳥居という結界を作ったのか。神名やイビ名についても解明されていない。宮古島が男女神と呼び、八重山でも男女神と呼んでいた例がある。それが、『琉球国由来記』には宮古は男女神、八重山は、神名、イビ名と記されているのか。問題提起のつもりで取り組んでみたい。

Structures and Transitions of *Miyatorion* Described in “*Ryukyu-koku yurai-ki*”

Abstract : The objective of this study is to illustrate the foundation and transition of *utaki* in Yaeyama by investigating the origins of the *utaki* called *Miyatorion* recorded in “*Ryukyu-koku yurai-ki*” (Record of the Origins of the Ryukyu Kingdom) and its present day structure. Still today, it is considered taboo in Yaeyama to talk about the *utaki* and the gods, which continue to inspire awe in the people. Attempts to uncover (expose) the identity of the gods even led to instances to violence in some regions. Therefore, studies of *utaki* over the years were mainly approached from the aspects of religion, folklore and rituals and did not (could not) touch the

core of the subject matter.

Nevertheless, scholars of the past have worked hard to produce results and have accumulated findings to a certain degree.

Around the time of the reversion of Okinawa to Japan, depopulation progressed due to severe droughts that devastated the area. Moreover, the penetration of new religions greatly changed ideas surrounding *utaki*. However, this was not a new trend. The villagers themselves offered the sacred area of *Miyatorion* for the construction of schools and monuments to the loyal dead. Teachings about *utaki* such as those that forbade people from breaking or damaging trees or taking them home had already changed and disappeared from the minds of people after the abolition of feudal domains and establishment of prefectures. Nevertheless, *utaki* still inspire a sense of reverence, and with the progress of urbanization, there is now a sense of urgency that they must be studied and recorded.

Miyatorion is located in the central area of Ishigaki City, and communities that formed and expanded around it gave birth to four villages, which developed into urban areas. The objective of this research is to investigate the origin of the *utaki* and each of its structures from the standpoint of not only religion and folklore but also history and archaeology to uncover the way in which the *utaki* was formed and developed.

“*Ryukyu-koku yurai-ki*” describes the time of the divine manifestation, which poses the question of the calendar and the reference to “*Tora no Hi*” (Day of the Tiger). There is also the question of why a *torii* gate was built, when the area in front of the *ibi* already established the bounds of the sacred area. The issue of the name of gods and the names of *ibi* (sacred objects of worship) has also not been explained. People in Miyakojima referred to the names of gods and goddesses, and there are instances where people in Yaeyama did so as well. However, the names of gods and the names of *ibi* are mentioned in “*Ryukyu-koku yurai-ki*.” Such questions will be raised and explored in this study.

はじめに

宮島御嶽は、沖縄県石垣市石垣に所在する。1705年に編纂された『八重山島由来記』には「宮島御嶽」、1713年の『琉球国由来記』1731年の『琉球国舊記』に「宮屋島御嶽」とあり、由来や神名、イベ名が記されている。しかし、由来記や舊記に記載されている、神名、イベ名や御嶽の形態である鳥居やオンヤ（御嶽屋）、メー（神庭）についての検討はあまりされていない。『琉球国由来記』を主として、考古学や歴史学、民俗学、言語学を援用しながら、それを、一つ一つ検討してみたい。あわせて、八重山の御嶽の古形を浮かびあがらせたいと思う。

I 章

『琉球国由来記』は1933年、伊波普猷、東恩納寛惇、横山重編纂『琉球史料叢書』⁽¹⁾に収録され、巻二十一に「八重山島嶽嶽名并同由来」が記載されている。その活字本によって多くの人が目にすることができ、八重山の御嶽の研究がすすんだ。それまでは、八重山で作成された『八重山島由来記』⁽²⁾（岩崎・97頁）の写本が知られていたが、活字化されていないため一般の人が目にすることは難しか

った。御嶽の研究を最も困難にしたのは、研究対象が神であることと、ひとびとの神信仰であった。神への畏怖もあり、八重山島出身者が御嶽を学問の対象として調査研究することは、時には暴力沙汰を起すこともあり困難をきわめた。そのため、御嶽の研究の先駆者はほとんどが島外者である。八重山出身者は祭祀行事などに絡めて研究発表しているにすぎない。1954年八重山歴史編集委員会から刊行された『八重山歴史』で喜舎場永珣が御嶽を論じた⁽³⁾。その後、牧野清が1990年『八重山の⁽⁴⁾お嶽』を出版した。これは、八重山の232の御嶽を調査したもので、八重山の御嶽研究にとって飛躍をもたらした。牧野以後、研究に取り組む者も増え、近年は、波照間永吉が精力的な研究を続けている⁽⁵⁾（波照間・15頁）（他にも明治期に御嶽を調査した田代安定などの先駆的な調査研究があるが、紙幅上留めておく）。

本稿は、先学の研究を踏まえ、また、考古学他を援用し、一御嶽の構造を徹底的に考察すれば、八重山の御嶽の形態の本質が少しは見えるのではないかとの思いから取り組んだ。宮島御嶽を取り上げたのは『琉球国由来記』等の「八重山島嶽嶽名并同由来」の御嶽の冒頭に記されていることからである。その由来を検討することによって御嶽誕生や神仏混合、近代における学校建設のため聖域分割など、時代の潮流の中で変遷する御嶽を描きたい。

II 章

(1) 宮島御嶽の由来

『琉球国由来記』巻二十一は八重山島の御嶽を中心に記したもので、「八重山島嶽嶽名并同由来」の冒頭に宮屋鳥御嶽（現在は宮島御嶽と記され呼ばれる。以後宮島御嶽と記す）は、以下のように記されている。

宮屋鳥御嶽 石垣村

神名 神ヲレハナ

御イベ名 豊見タトライ

「右嶽、立始ル由来ハ、昔、當島ニハ村無定、人間、愚痴無道ニシテ、慈悲仁愛ヲ不知。所々、陣場能所ニ、家ヲ作り、戦争フコト、果テモナク、強力ニ任セ、人ノ財産ヲ奪取、或打殺シ、力任セニ、弱者ヲ下人に召仕フ。扱神ヲモ不敬。然處、其頃、兄弟三人、住居ス。其名、一人ハマタネマシズ、一人ハナアタハツ、一人は平川カワラト云。マタネマシズハ、信仰深キ者、在所ハ、石城山ト云所ニ居リケルガ、明レバ、寅ノ日暁天ニ、テマサシモトタイ、ト申ス御神、マタネマシズ妹ニ、御乗移リ、宮島山ト云所ニテ、託宣ニ、扱、神ソラト申ハ、人間ノ父母、人ト申ハ神ノ子也。神ノ子ナレバ諸人皆兄弟也。同兄弟トシテ、一向争戦ノハテナク、人ノ命ヲ失フ事、如殺鳥獸。是神慮ニ不叶。汝能慈悲ヲ以、諸人ヲ愛シ、正直正路ヲ以、神ヲ敬フベシ。行末守ベシ。我棲家此山。ト託宣アリテ、神はアガラセ給フ。マタネマシズ、神慮ヲ拝ミ、宮島山近キ石垣ニ、在所ヲ立、彌慈悲ノ心ヲ以、兄弟妹ヲ始メ、諸人ヲ愛ケル。兄弟作物年々ミノリ、満作セリ。神ヲ敬フ、其験アリ。諸人は是ヲ見テ、次第次第ニ集テ、村ト成リ、彌神ヲ敬フ也。今ノ石垣・登野城二个村是也。彼三兄弟、拝ミ始メ、嶽ト崇敬メケル故、諸人モ崇敬仕来ルトナリ」

(6)
『琉球国由来記』・596頁)。

由来には戦争に明け暮れる社会にテマサシモトタイという神が寅の日の早暁に現れ、宮島山で、マタネマシズに憑依し、此処を棲み家とすることを託宣した。ころよき3兄妹が信仰し、作物は満作した。やがて、人が集まり村が発展したと記している。3兄妹はビィギリィ(兄弟)とブナリィ(姉妹)で、ブナリィのマタネマシズは兄弟を守護するオナリ神であろう。3兄妹が住んでいた石城山は山全体が岩石であった。スクヤグスクという呼称は拝所や御嶽と関係があるといわれる(仲松・41頁)⁽⁷⁾。石城山は山全体がご神体と考えられる。石城山は「13世紀後半から14世紀末にかけてのアブ時代の遺跡である可能性が強いと考える」(大浜・13頁)⁽⁸⁾という。石垣島の高地にあった集落が海岸線の砂丘近くに移動したのは、12世紀から17世紀にわたる(島袋・240頁)⁽⁹⁾。12世紀から13世紀にかけての八重山の編年は新里村期とされる。新里村期は無土器から再び土器を作り始める「変革の時期」という点で重要という(島袋・243頁)⁽¹⁰⁾。

こういう時代の流れの中で石城山から宮島山へ移動したのであろう。島袋は、また、この時期、石垣島のピロースク遺跡から出土した人骨は「民俗方位の西枕を意識していないようだ。これは死者に対する宗教上の枕の位置(北・西)が、この時期にはまだ意識されていなかったことを示唆しており、埋葬遺構が出土した際の、時期的な判断基準となる」(島袋・244頁)⁽¹¹⁾と述べている。

宮島御嶽を中心に発展した4か村の遺跡や貝塚は発掘遺物から考察すると15世紀から18世紀にかけてのものである。「登野城遺跡」(登野城86番地)は14世紀から16世紀の遺跡で、発掘された人骨16体の頭位すべてが北西である⁽¹²⁾。『琉球国由来記』記述の殺伐とした時代やピロースク遺跡人骨の方位からすると、登野城遺跡の時期は社会が安定しており、仏教の影響からか、人骨の埋葬にもすでに一定の方位が決まっていることを示している。大浜永亘は石城山から出土の土器などを検討し、13世紀後半から14世紀末説を提示しているが、4か村の貝塚や遺跡の遺物からの年代を考えると『琉球国由来記』の宮島御嶽の由来は14世紀末から15世紀の頃を描いていると思われる。

テマサシモトタイ(『八重山島由来記』ではマサシモトタイ。テマサシモトタイについてはマサシモトタイではないかと思う。マは真や敬意を表す接頭語で、『琉球国由来記』の句点の打ち間違えではないかと思われる。しかし、本稿では『琉球国由来記』の表記の通りとする)が出現した「寅の日」というのも『琉球国由来記』を検討するうえで重要だ。沖縄に暦が伝わったのは中国の明朝代(1368~1644)で、『明実録』によれば、1372年、琉球国を支配した中山王察度は明代に用いられた大統暦を給賜した。これより以後、琉球は中国の暦法に従ったという⁽¹³⁾。また琉球の正史といわれる『球陽』によれば1465年に楊春枝が閩(中国福州)で暦法を学んだとある⁽¹⁴⁾。しかし、『明実録』の大統暦や楊春枝の暦法が導入されても、それが地方に普及するには長い年月を要したことは想像に難くない。

18世紀に書かれた『慶来慶田城由来記』は、昔、暦のない時代は草木の芽を見て春夏秋冬四節を定め、スバル星を見て播種の時期を定めたとある⁽¹⁵⁾。八重山では暦法のない時代が長く続いたはずだ。17~18世紀になって、やっと暦が普及し祭祀の日取りが行われている。テマサシモトタイ神が出現した寅の日は暦の普及からして、後年の役人による作為であると思われる。

神出現の日をカンビュウル(神日和)という。その日は神出現のため「忌み日」である。『八重山

島大阿母由来記』によれば、八重山最高の神職である大阿母は公儀御嶽である美崎御嶽に「毎月酉日寅の日美崎御嶽え被出」とあり、『八重山島嶽々由来記』には「右両日ハ古より御願日撰ニ用來候事」とある。古とはいつか不明だが、琉球王府の支配下に置かれた時代であろう。

テマサシモトタが、太陽が昇り始める早暁に出現するというのは、太陽神の霊力をマタネマシズ妹に憑依させ、マタネマシズこそ太陽神のシヅ（血筋）の者ということであろう。

テマサシモトタイ神は宮島山でマタネマシズ妹に憑依し、われはこの山を栖とすると託宣した。だが、宮島御嶽の神名、御イベ名にもテマサシモトタイの名はない。同様の例は、宮良村六御嶽の由来に、サカイガネ、ヲレマサリ、アシヒヤカリ、イリキヤガネ、ヤトリガネ、ミモノガネ、というヲモト大アルジから派遣された六神が、六人の女性に憑依し、心よき、西カワラ、東カワラ二人を守護するようにと託宣した。村人は「彼六神を六御嶽に勧請して今迄崇め来也」とある。しかし、勧請されたはずの六神の名は六御嶽の神名、イビ名にもない。なぜ、神名、イビ名にその名がないのかは分からない。

(2) 名称

神による宮島御嶽の聖地の選定は、牧野清によれば「このお嶽の境内については、「往昔大川のフドーヤー（大道家）の畑であったが、鳩が白神酒をふくんで空から落とし、区域を示した」という趣旨の伝えがあるという」（牧野・132頁）⁽¹⁹⁾という。筆者が祖母や母、大川の古老から聞いた話では、フドーヤーの人が早朝、宮島山に出かけると、米のシトウギ（粢）が木々やクワズイモの葉に点々となっていた。それは神の徴であるとして、フドーヤーの人は、土地を神に献上したという話であった。⁽²⁰⁾粢は米を臼ですり潰したもので、餅等の神前の供物ものの材料で、粢を薄くして発酵させてのが神酒であるように、粢は神に捧げる神聖なものである。この伝承は、宮島御嶽の名称を考えるうえで、示唆に富む。宮島の宮は、方言でメーあるいはミャーという。メーは宮ではなく、庭や広場を指す（宮良・605頁）⁽²¹⁾ことばであろう。鳥（トゥリィ）の意もあるが、鳥ではなく、トゥルン⁽²²⁾は取る、占拠の意味であろう。トゥルンは連体形や已然形の「トゥル」（宮良・408頁）⁽²²⁾であると思われる。宮島屋御嶽のメートゥルは、神が聖地と定め、占めた神庭、広場の意であり、オンは「ヲガミの転化で拝所の略称」（宮良・226頁）⁽²³⁾である。宮島御嶽は「神が選定した聖地にある拝所」という意であろう。

Ⅲ章 御嶽の形態構造

(1) 構造概観

御嶽は現在、オン、ワーなどと呼ばれているが、ヤマとも呼ばれる。それは、御嶽のある山やタキ（岳・嵩・嶽）ムリィ（盛・森）から来たものである。『琉球国由来記』の登野城村「美崎御嶽」の項には中山軍の無事帰帆を真乙姥が断食祈願したところが美崎山で、御嶽として崇敬されたとある。宮島御嶽もテマサシモトタイ神が宮島山に顕れたとある。それからすると、ヤマやタキ、ムリィなどは山岳信仰からきたことばであろう。

現在の御嶽の構造は概ね、周囲を石垣やブロックで囲い、入り口に鳥居が建ち、メー（庭）、オン

ヤー（拝殿）、ナカマー（中庭）、ウブ、イビ（ご神体）の順である。

波照間島のピティヌワー（野原の御嶽）のように鳥居がなかったり、マイツバ御嶽のようにオンヤーとウブがつながり中庭がなかったり、イヤナシ御嶽のようにオンヤーがない御嶽もある。

宮島御嶽の現在の構造は、敷地をブロックで囲み、入り口に鳥居、奥に向かってマー（庭）、オンヤー（拝殿）、ナカマー（中庭）、男子禁制であるウブ入り口の瓦葺の門、ウブ、ウブの中の石柱に平石を乗せた鉄扉門、イビの順である。

(2) 聖地

宮島御嶽は1771年の八重山・宮古地方を襲い大災害をもたらした大津波の際も、「宮島御嶽並井数旧式ノ通り無別条候⁽²⁵⁾」とあり、被害を受けずに1909年の頃まで聖域として保存されていた。宮島御嶽は明治の「古地図⁽²⁶⁾」を見ると広大な敷地である。宮島御嶽は1881年の「大地方村々御嶽并威部名調査⁽²⁷⁾」（喜舎場『届進達報告綴』八重山島役所）では御嶽敷地3780坪とある。古地図を見ると敷地全体が森に覆われている。しかし、宮島御嶽の聖地は1909年、石垣尋常小学校建設のために4300坪が分割された。発端は八重山島高等小学校構内に大川尋常小学校を合併すると八重山村村会が決議したことに始まる。それに対し、学校のない石垣、新川村の住民から、登野城村にだけに学校が設置される事への不満や、通学距離が遠すぎると非難が出て学校誘致に御嶽の敷地を分割することを条件に運動が行われた。宮島御嶽の敷地が学校建設が決定されると、「字石垣有志者数名十名を招集シ宮島御嶽雑木伐採ノ件ニ付協議会ヲ開ク⁽²⁸⁾」（石小・53頁）と協議がなされ、やがて「学区住民によって伐採伐根され、その処々に校舎建築用の島材が積まれていった。（略）校舎建築は那覇から来た本土出身者の松山組によって建設された。祝賀会は盛大でした⁽²⁹⁾」（宮良・368～369頁）と御嶽が伐採されたのを目撃した児童は述べている。学校は1910年石垣尋常小学校として開校した。

1927年、児童数が増すと、校庭や校舎が狭くなり「御嶽の凸出した部分を校地として寄付することを学校、氏子、字民が懇談し、町へ寄付する条件として、ウブの屋根を鉄筋コンクリートにし、境界は垣を積みめぐらすことにしている⁽³⁰⁾」（石小・155頁）と記している。

1936年の記録では総坪数は817坪（牧野・130頁）で現在は548坪（石垣市教育員会文化財課）である。

神を畏怖する信仰心の厚い人たちが、小学校建設のためとはいえ、神の聖域を分割し、提供するという意識の変化は近代化のためであろうか。大川村の人口が増え分家すべき子弟の住居や屋敷がなく困っている。この際、大石垣御嶽の敷地を競争入札に付したいとの伺いが大川村惣代通事保久利、辻野山戸から八重山嶋島司野村道安に出されている（八重山博物館蔵題名不明⁽³²⁾）。これに伴い村民からも土地購入願が出されている。

ここには、神を恐れる人々の姿は見えない。民間だけでなく、明治政府も、御嶽の敷地を分割し八重山区裁判所を設置したようだ。「御嶽を開拓した裁判所、これより恐れ敬ふもの漸く少なし⁽³³⁾」（柳田90頁）と柳田國男はメモを残している。八重山区裁判所は1900年に開庁した。柳田のいう御嶽の開拓とは美崎御嶽のことであろう。御嶽に対するこのような官民の姿勢は「拝所の多いことから考へると八重山も随分敬神思想が漲ってゐるやうにあるが実際は宗教心があまりないようである⁽³⁴⁾」（『八重山新報』大正11年4月3日号）と新聞に報じられるほどである。

近代化の波が人々の神への畏怖や観念を変えてしまった。1923年、分割した学校敷地には、在郷軍人会石垣村分会によって石垣村忠魂碑が建立され戦意高揚が図られた。宮島御嶽の学校敷地や御嶽の整備は官主導というよりもむしろ、住民の内発的なものであったと思われる。

(3) 鳥居

鳥居は外界と聖域を隔てる結界である。沖縄や八重山で鳥居が建立された年代は不明である。波照間永吉が先学の説を紹介している⁽³⁵⁾。文学者伊波普猷は「薩摩から琉球に派遣された大和在番が帰国の際、海上安穩を願って寄進した。普天間その他の神社などに寄進したのも同じ気持ちの表れだ」という。一方、八重山郷土史家牧野清は「伊波説では、離島まで深く浸透している事実は説明し難い。私は神域の象徴として権現堂にならい、大和文化の著しく触発されたあの頃の時代背景の下、島民自らが進んで鳥居を建てたと思う。それなればこそ、群島の各島々まで浸透したに違いない」と述べている。

鳥居が日本文化の影響にあることは、宮良當壯『八重山語彙』で鳥居を引くと「トゥリー」とあることから確かであろう。

御嶽にはウブの入り口にアーチ型や四脚門があり、聖域と外界の結界を定めている。それでもなお聖域と外界の結界として鳥居が新たに建てられたのはなぜであろうか。伊波がいうように薩摩の役人の寄進や、牧野の大和文化に触発されて権現堂の鳥居を真似て建てたというのも理由の一つかもしれない。しかし、それは島民にとって必要に迫られて建てたものではないだろう。人口が増加し、役人の御嶽への参詣の機会が増え、これまで、イビの前でツカサや村の神役だけで行われていた祭祀が、村人も参加し、神とともに饗宴するということが新たな結界を設定することになったと思われる。鳥居はイビに入れない新たな結界として建立されたと思われる。沖縄における鳥居の建立は『球陽外巻遺老説傳』外巻一普天間権現の由来二説の「結彩門（俗に鳥居と呼ぶ）」⁽³⁶⁾が記録としては古いと思われる。しかし、普天間宮の建立や鳥居設置の年代は不詳である。八重山の権現堂は1614年に建立された。1702年の「幕府撰元禄琉球八重山絵図」⁽³⁷⁾（国立国会図書館蔵）には権現の絵図が記されているが、鳥居の図はない。また、1771年の大津波の記録でも、権現堂の「宮拝殿引崩され跡形もなくなった」⁽³⁸⁾（大波）とあるが、鳥居の記録は見当たらない。他の被害を受けた御嶽も鳥居の記録はなく、大津波当時、鳥居はなかったと思われる。

鳥居の絵図で古いと思われるのは、1843年から翌年の44年にかけて、3回八重山を航行したサマラン号のサー・エドワード・ベルチャーの航海記録の一部である「八重山来航記」（安積・31頁。ラブ・オーシュリ／上原・60頁）⁽³⁹⁾に御嶽の鳥居が描かれている。不思議な鳥居で、笠木がなく、島木と貫、それに額束の部分には幅の狭い板を打ち付けてある。島木は柱の頂上に設置されず、わずかに下に貫入れ、はみ出た部分を柱に差し込み、出ている部分は柱の中であつないでいるように見える。島木の端が下に向いている鳥居は現在でも確認できない。なぜこのような鳥居を建立したのか。不思議な鳥居の絵図である。

明治の石垣四ヶ村全図（古地図・9頁）⁽⁴⁰⁾には権現堂と桃林寺に鳥居が描かれている。権現堂には朱色の鳥居が海に向かって建てられていたとの伝承がある。しかし桃林寺の鳥居については不明だ。記録もなく、絵師の誤りではないかと思われる。

『諸神社家屋并風俗見取図』⁽⁴¹⁾や『八重山の古地図』、⁽⁴²⁾『八重山蔵元絵師画稿』をみると、明治期には各村の御嶽にも鳥居が建立されている。『八重山の古地図』には97か村中、81か所の御嶽に鳥居が建立されている。『八重山の古地図』にはなかった石垣島最北端の徳底御嶽や西表島の鹿川、崎山の御嶽も『諸神社家屋并風俗見取図』には鳥居が建立されている。鳥居が絵図上で鳥居が確認されないのは波照間島だけである（長石村の図には鳥居らしきものが見えるが、確認できない）。波照間島のピティヌワー（野原の御嶽）と呼ばれる三御嶽は現在でも鳥居がない。しかし、与那国島は鳥居が建立されている。明治に3度八重山を訪れた田代安定は鳥居について「神坐ハ多ク前面ニ華表ヲ建テ祠ヲ設ケズ」と述べている。⁽⁴³⁾華表とは中国で陵墓や宮城等に立てる標識であり、神社の鳥居をいう。田代のいう華表は鳥居と見られる。鳥居は木材で造られていたが、昭和初期の頃から在郷軍人会が中心となり各村落が競い合うようにコンクリート製の鳥居を建立するようになった。なかには、鳥居は必要ないと古老が在郷軍人が対立することもあったという。これは、鳥居が宗教的なものから、政治的な意図を含むものに大きく意味を変えたといえる。

宮島御嶽の鳥居は、1923年頃の写真を見ると木造の神明形に似た鳥居である。1935年5月には在郷軍人関係者が中心となり、靖国神社の鳥居風なコンクリート製の鳥居を建立した。

鳥居のなかには、八重山島蔵元の火の神拝所のような朱色の鳥居もある（「蔵元前広庭における養老式典」⁽⁴⁴⁾の絵図）が他にはこのような朱塗りの鳥居はない。

八重山の鳥居は公儀御嶽といわれる美崎御嶽か権現堂に航海安全を願って、沖縄から派遣された在番が寄進したものが広まったと思われる。

(4) メー（神庭）

庭や広場のことを八重山では「メー」「ミヤ」「ミヤー」などという。『おもろさうし』では「真^ま庭^ぢ」⁽⁴⁵⁾とあり『混効験集』⁽⁴⁶⁾では「みや 庭之事」と記している。宮島御嶽では鳥居とオンヤー（拝殿）との間にあるのを「メー」と呼び、オンヤーとウブの間の一段と高くなった庭をナカメーと呼んでいる。鳥居とオンヤーの間は庭というよりは広場で、祭祀の際、旗頭、舞踊や獅子舞などの奉納芸能等が演じられる。

谷川健一は「ミヤ」について、「ミヤはももとは神祭祀をする庭を言った」（谷川・16頁）⁽⁴⁷⁾と述べている。谷川はまた、久高島のイザイホーの行われるウドンミヤー（御殿庭）の例をあげ、「神祭祀の行われる広場がミヤであり、そこに造られた仮小屋のちに宮と呼ばれることになったと考える」⁽⁴⁸⁾（谷川・16頁）と記している。

御嶽の庭は神庭で、神々だけが遊ぶことのできる神聖な場所であった。それは、イビの前やウブの中であったと思われる。しかし、メーはツカサや神役だけが遊ぶ御嶽のカンダアスピ（神たちの遊び）からやがて、ツカサたちだけではなく、村人が神と饗宴する場としてイビの前やウブから次第に広がっていったのがナカメーやメーであろう。神遊びは御嶽とつながりのあるトゥニムトゥ（宗家）でも行われ、『慶来慶田城由来記』には、「昔、神遊びという祝いがあって、老若男女がとねもと（トゥニムトゥ。宗家）の家々を定めて、その家に集まり、二、三カ月の間、神酒の作りたての濃いものを調べ、男は魚を獲り、女は神酒を調べ、ならびに、すない（スーナイ。膾。和え物）をつくり二、三カ月間も祝ったという」⁽⁴⁹⁾現在、消滅状態にある、トゥニプーリィ（宗家での収穫祭）は、このよう

に盛大であったのである。1678年に琉球王府から御検使として派遣された。恩納親方安治おんな おやかたあんじによって禁止された伊里幾屋安真理（イリキヤーマリ）の祀りは年中年次神遊びをなしたとある。そのため、「多くの民力を傷ひ、民財を妄費(50)す」として禁止された。

神遊の場であるメーは時代によって拡張したり縮小したりして変遷している。

(5) オンヤー（御嶽屋）（拝殿）

オンヤーはイビから離して建てられているが、もともとはイビヌメーやウブの中に造られた仮小屋であったと推測される。それは「神司を13年以上つとめた神人は神祝いを行う。その時に造られたトゥマヤ（苫屋と思われる）（略）マーニ（クロツグ）の葉で造り、しめ縄をはりめぐらす」（牧野・20頁写真(51)）のようなものであったと思われる。

イビの前で行えばいい祭祀を、なぜ離れたところにオンヤーを建て行くのか。谷川健一は神の祭所と葬所は同じところで「神社が古い墓地の中に造られたとしても別にあやしむに足りない（略）古墳のまえでいとなまれた祭場にやがて、神社がたてられた場合もあることは十分に推測される。後代の触穢の思想が、祭場と葬所の紐帯を切断してしまった」（谷川・24頁(52)）と述べている。

宮島御嶽を中心に発展した15～17世紀の石垣、登野城の貝塚や遺跡からは生活用具とともに人骨や土壙墓が発見されている（石垣市文化財報告書(53)）。これは、生活空間と葬所が隣接してあったことを示している。

仲松弥秀は「現代人の死人に対する考え方と、古代人の死人に対する考え方とは必ずしも一致しない」と述べ、沖縄本島南部の屋敷内の墓や久高島の古老の話のように、「死んだ家族を屋敷の後ろや軒下に葬した（略）戦後数年まで、死人を家裏に葬していた島が八重山諸島にあったのである。このような例などからすれば、死人を怖れ、穢れといった思想などは考えられない。古代屋敷内に墓があったり、屋敷のすぐ隣に御嶽・グスクがあったりしている村が此方彼方に見出されるということも証となるであろう」（仲松・58～59頁(54)）と述べている。

仲松の例は伊波普猷の沖縄の津堅島や久高島、山原、沖永良部、八重山の葬制と重なるが、伊波は論考の中で、遺体を「津堅島では蓆で纏い、久高島では館柩となり、沖永良部島では、棺柩の上にモヤー（野屋）という仮小屋を立てたところに発達の経路を知ることが出来る」と記している。八重山のヌヤー墓も津堅・久高のように発達してきたに違いないと述べている（伊波・136～138頁(55)）。

そのうえで伊波は「このような風習は南島全体で行われていたであろう。沖縄本島のそれは、仏教及び儒教などの影響で著しく変化して原形を留めないまでになった」（伊波・135頁(56)）と述べている。谷川の「触穢の思想」にも通じるであろう。

オンヤーは仏教の浸透によって触穢の思想が浸透する中、埋葬地から離れた場所に建立されたと思われる。

オンヤーには神棚に香爐が置かれている。イビからオンヤーに神を招くことをツカサは案内と称している。波照間島では「ピテヌワーには特定の神が常駐し、特別な場合にはウチキヌワーに案内されるという」（波照間・466頁(57)）。おそらく、オンヤーにはそのような意味も含まれていると思われる。オンヤーはイビから神を招くため、当然、神域である。そのため、入り口には紙垂のついたしめ縄が取り付けられている。オンヤーはイビやウブのような神聖な場所でありながら、男性が立ち入ること

も許している。オンヤーはイビをメーに移し村全体の人々と神とが饗宴する性格も持っている。

オンヤーがいつごろから建立されたかは不明であるが、1703年「宮拝殿以前者かや葺ニ而候処奥原親雲上檜木ニ而瓦葺之訟達四月四日より取付五月廿七日迄成就仕候」(八重山島年来記・289頁)⁽⁵⁸⁾とある。宮は権現堂であろう。それ以前は茅葺の拝殿があったことが分かる。『八重山蔵元絵師画稿集』の「御嶽参詣の図(1)」⁽⁵⁹⁾(22頁)には美崎御嶽(権現堂との説もある)と思われる御嶽があり、鳥居と瓦葺のオンヤーが描かれている。しかし、田代の『諸神社并風俗見取図』⁽⁶⁰⁾では、ほとんどが茅葺である。竹富島の八御嶽のうち、七御嶽が拝殿も本殿もない。これからすると、オンヤーの成立は村落や時代によって異なる。ちなみに波照間島でも、明治の『八重山の古地図』(33頁)の「東之村」⁽⁶¹⁾の御嶽には茅葺のオンヤーが建っている。これは、ウチキヌワー(村の御嶽)の美底御嶽や新本御嶽である。両御嶽はピテヌワー(畑の御嶽)の一つである白郎原御嶽への遥拝所である。白郎原御嶽には鳥居やワヌヒー(拝殿)などの建物がない(波照間・468頁)⁽⁶²⁾。なぜ遥拝所には拝殿があり、ピテヌワーにはないのか。

おそらく男子も参加して饗宴するために遥拝所にワヌヒー(拝殿)を建てたと思われる。

瓦葺のオンヤーは近現代に建てられたものである。宮島御嶽のオンヤーの創建は不明だが、1881年『大地方村々嶽嶽並伊部名拝殿神官人調帳』⁽⁶³⁾によれば「拝殿十坪」とある。1936年、宮城信範の「神社御嶽及拝所調査報告書」(牧野・130頁)⁽⁶⁴⁾に、「本殿一坪、拝殿一六坪」とある。拝殿の16坪はオンヤーで、本殿1坪はイビの祠を指である。現在、宮島御嶽のオンヤーは7坪半というから以前のオンヤーの半分以下である。

1922年、石垣村では有志によって、オンヤーの改築計画がすすめられ「宮の構造も内地式神社の様式に改むる由。尚拝所構内を公園化する」(『八重山新報』大正11年12月2日号)⁽⁶⁵⁾と報じている。1923年、入母屋造りの瓦葺の拝殿が完成した。宮島御嶽の現在の構造はこの年に決定したと考えられる。神社式に改めるとしたオンヤーだが、懸魚が正面に取り付けられるなど神社様式とは似つかないオンヤーであった⁽⁶⁶⁾。1960年、石垣字会は御嶽を神籬式に改築することを決議し改築した。同化思想による御嶽の整備、改築であった。

御嶽では、もともと香炉が置かれ線香を焚く風習はなかった。波照間島のピテヌワー(畑の御嶽)と呼ばれる真徳利御嶽、白郎原御嶽、阿幸俣御嶽の三御嶽は最も神聖な御嶽といわれる。真徳利御嶽ではブーと呼ばれる自然石(ご神体)があり、「そこには香炉、花瓶などはない。(略)神司やパナヌフは線香を立てず、花も活けず、供え物として、ニンニク、塩、神酒を供えて、祈りを捧げる」⁽⁶⁷⁾(波照間・467頁)。他の2御嶽も同じである。鳥居も拝殿もない。これが、御嶽の原形と思われる。1477年朝鮮濟州島の船が与那国島に漂着し、西表島、波照間島、新城島、黒島、多良間、伊良部、宮古、那覇を經由して帰国した。八重山の島々の見聞記には御嶽の記録はないが、波照間島のピテヌワーと同じような信仰をしていたと思われる。ピテヌワーには香爐がなく線香も焚かないが、ウチキヌワー(村内の御嶽)には陶器などの香爐が置かれ線香が焚かれている。

折口信夫は「香炉とは呼ばぬ前の遥拝の対象として切り石の立て石の立つ物があり、其後、其に當るほんとうの香炉を、おなじ用途のあるものと考えようになった」「御嶽、拝所などの屋外の石香爐には絶対に線香を燃やすことなく、唯供へて置くばかり(略)先島では、ある種の方式は後入り要素である為か、拝處の拝殿めいた處などでは盛んに線香を焚く」(折口・85頁)⁽⁶⁸⁾と述べている。「あ

る種の方式は後入り要素のため」とは仏教の影響を指すと思われる。

朝鮮人漂流記の那覇の記録では「七月十五日、諸寺刹、幢蓋を造る。或いは彩段を用い或いは彩繪を用う。其の上に人形及び鳥獸の形を作り、王宮に送る。居民、男子の少壯なる者を選び、或いは黄金の仮面を着し笛を吹き鼓を打ちて王宮に詣る。(略)其の夜、大いに雑戯を設く。国王臨観す。故に男女往来て観る者、街を填め巷に溢る。財物を下敷し宮に詣る者亦た多し」(『朝鮮王朝実録』⁽⁶⁹⁾236～237頁)とあり、仏教が盛んであったことがわかる。

しかし、八重山で仏教や神道が本格的に普及するのは1614年の桃林寺、権現堂の創建によってである。

ツカサの御嶽での祈願、権現堂前での雨乞いの綱引き、小浜の豊年祭に出現するアカマター、クロマターと呼ばれる世持ち神本体に線香が直接立てられる等、神仏習合思想の浸透によって、御嶽にも香爐や線香が置かれることになったと思われる。

御嶽におけるツカサの香爐は一代限りで、ツカサが引退や死亡すると、香爐はウブ内に壊され廃棄される。就任したツカサは前代のツカサの香爐を使用するのではなく、自分の新しい香爐を据えて拝む。ツカサは一代、神は永遠であるという思想が香爐からは読み取れる。

香爐はキンイシと呼ばれるサンゴ石灰岩を削ったものから、陶器や青磁の香爐もある。15世紀から18世紀にかけての登野城遺跡からは青磁の香爐が碗や皿に次いで出土が多いという(『登野城遺跡』⁽⁷⁰⁾23頁)。これは神仏習合思想が八重山でも行き渡ったことを裏付けるものであろう。

『琉球国由来記』の「香造」によれば琉球での線香造りが始まったのは不明だが、尚賢王世代の崇禎年間(1628年～1643年)に南氏奥田親雲上映玄が造り始めたとある(『琉球国由来記』巻四⁽⁷¹⁾135頁)。同由来記には王城の御嶽では抹香が焚かれ、沖縄本島や周辺離島の御嶽では線香が供えられている。しかし同由来記には、八重山の祭祀について全く触れていないため、八重山で線香がいつごろ立てられたのかは不明である。桃林寺創建後に普及したと推察される。

(6) ナカメー (中の神庭)

ナカメーはイビヌゾー(イビの門)前にある神庭である。御嶽が森林に覆われ、結界を示すものがない時代には神と遊ぶのはツカサたちであり、それはカンダカスビ(神たちの遊び)、はイビヌメー(イビの前あるいは庭)で行われていたであろう。しかし、政祭一致から政治の力が強くなるに従い、イビに入れない役人や村人たちも行事(祈願)に参加できるため、ナカメーは造られたと考えられる。ナカメーは男性が祭祀行事に参加出来る最後の場所である。

ナカメーには祭祀には海砂を撒き清められた。プーリィ(稲の収穫、予祝祭)の祭祀には村人から皮餅や神酒、花米、線香などが供えられ、ツカサと男性の給仕によるミシャグパーシィ(お神酒囃子)が行われる。参加者はナカメーから、ウブ入り口の門、中央にある香爐に向かって拝する。

メーは奉納芸能する場所で、ナカメーは一般の人も参加して神事を行う場所であり、メーより厳粛な場所である。

⁽⁷²⁾古老によると戦前(明治の頃は分からないが、大正から戦後の一時期まで)は、イビに向かって右側はユカラピトゥ(士族)、左側はブザ(百姓)の席と決まっていたという。一般女性の御嶽参加はほとんどなく、女性たちはハカ(区画)のトゥニムトゥヤー(宗家)に集まりトゥニプーリィ(宗家

での収穫、予祝祭)をした。トゥニムトゥヤー(宗家)は石垣では、士族の家系で、行事での祈願は嫁が行った。トゥニムトゥヤーは士族の居住している地域で、百姓が参加したかは不明である。現在、トゥニプーリィは行われていない。

宮鳥御嶽のツカサはトゥニプーリィには参加しない。

(7) イビ・ウブのゾー

宮鳥御嶽のナカメーとウブを隔てる境界は、栗石と呼ばれる石灰岩の垣が積まれ、入り口には、瓦葺の四脚門がある。八重山の古い御嶽にはアーチ門があるが現在、宮鳥御嶽にはない。しかし、柳田国男が1921年に宮鳥御嶽を調査した時のメモにはアーチ形の絵図があり、説明には「干瀬の石にて此の形の内門をつくる。此より内は巫女のみ入る。内陣にあたるなり。オブという」(柳田・72頁)⁽⁷³⁾とあるから、アーチ形の門はあったはずだ。柳田が宮鳥御嶽を調査して、2年後の1923年には宮鳥御嶽の改築や整備が行われている。村の役員たちは神社様式に沿った整備を検討していた。⁽⁷⁴⁾整備に伴いアーチ門は撤去され、四脚門が建築されたと思われるが、ウブ内には撤去されたアーチ門の石材の残痕はなく、どこに撤去されたかは不明である。門はイビヌゾーとかウブヌゾー、なかにはチュウムン(中門)などとも呼ばれ⁽⁷⁵⁾河野富宮鳥御嶽元司もチュームンと述べられ⁽⁷⁶⁾(談・1999年)、建築家の田辺泰の「宮鳥嶽配置図」(『琉球建築』)にも中門とあるが、呼び名は曖昧である。門の中央には香爐が置かれ、一般の人はナカメーからこの香爐に向かって拝する。線香を立てるのはツカサで、一般の人が線香を立てることは出来ない。

祭祀の際には、しめ縄が取り付けられる。しめ縄について、御嶽名は不明だが、田代安定が、神坐の周辺に注連縄を繞してあるといい、また、西表古見村の三離島はかつて、村落であったが、廃村になり、近傍に神社を建てているが、古昔からしているという岩窟に「縄シメ」を張っていると書いて⁽⁷⁷⁾いる。宮鳥御嶽では祭祀の際、イビ、四脚門や御嶽屋、鳥居に左撚りの縄に紙垂のしめ縄^{して}がつけられている。このようなしめ縄がいつ頃から八重山の御嶽に張られていたかのかは不明である。1943年1月25日石垣町で家庭祭祀指導講習会が開催された。講習会に先立ち、宮鳥御嶽の神前に於いて玉串奉奠の儀式をしたという。講師は那覇の浮島神社々掌真壁恵愛(道彦)であった。講習会で、御嶽のしめ縄にも触れ、1、各御嶽の拝殿の御香爐の前の上桁に注連縄を張ること。2、又入口の桁にも太い長い注連縄を張ること。3、又鳥居にも注連縄を張ること。4、境内の周囲にも注連縄を張ることと述べている⁽⁷⁸⁾(喜舎場永珣ノート「八重山の神祇」)。アジア太平洋戦争が激しさを増す中、御嶽信仰を国家神道と結び付けようとする神祇院の「神社明細帳」の整備によって無各社を一掃する運動と結び付いて、しめ縄が、御嶽にも張られるようになったと思われる。

(8) ウブ

ウブは石垣で囲まれ、その中にイビやイビヌメーがある。宮良當壯によれば「神社の奥に在る狭き禁断の庭にして、神人のみの入るを許さるゝ所なり」(宮良・312頁)⁽⁷⁹⁾とある。ウブは『おもしろさうし』「あおりやへが節」(西郷・外間⁽⁸⁰⁾56頁)に産玉(うぶたま)とあり、頭注によれば、「物を産み成す力を持つ玉」とある。産み成す力を持つ者は女性である。新城島では「ウブ・アッパー」(曾祖母・大阿母の義)⁽⁸¹⁾鳩間島では「ウブ・アブ」(叔母・大阿母の義)である(宮良・231頁)。ウブは女

性たちが生命を産む場所と考えられる。仲松弥秀は与那国島の屋敷墓は屋敷のうしろの石垣の下に設けられていて、そこを「ウブダテ」といった。「ウブダテ」は産み建てや初立の意であろうと述べている（仲松・39頁⁽⁸²⁾）。谷川健一はウブについて「そこは神を祀る者しか踏み入ることを許されない聖域である。このウブには神がこもってミアレ（誕生）する始原の場所という意味がこめられていると思われる」（谷川・35頁⁽⁸³⁾）と記している。ウブは神が誕生と再生をする神聖な場所である。そのため、囲いがされ男子が踏み入ることは許されないのである。

宮島御嶽では、ウブの中に琉球石灰岩の支柱に屋根を乗せ、鉄扉の門が造られているが、それは、1983年、ウブの中に不審者が出入りするために造られたものである。

(9) イビヌメー

イビヌメーはご神体のイビのメー（前）あるいはメー（神庭）の意であろう。ツカサや神役がご神体と直接対坐する場所である。御嶽の原形は、イビとツカサが神と対面し祈願する場所はイビヌメーだけであったのではないか。イビに次ぐ神聖な場所であり、神棚のあるオンヤーより重要な場所である。

(10) 神名

『琉球国由来記』に八重山の御嶽は神名とイベ名が区別され、それぞれ違った名称が記されている。沖縄本島や周辺離島では、たとえば、安里村のオキナワノ嶽を例にあげると「神名ヨリアゲモ森カネノ御イベ」とあり、神名とイベ名が同じで、どこまでが神名でどこからがイベ名か分からない。宮古島は、男神「真種子若アジ」女神「マヒトマラツカサ」、男女神「カネトノ・マツメガ」というように記され、八重山のように神名、御イベ名はない。多良間島、水納島は神名のみで、イベ名はない。沖縄本島や周辺離島、宮古島、八重山と地域によって、なぜこのように記載が異なるのかは分からない。『琉球国由来記』には八重山では宮古島のように男神、女神はない。しかし、由来記にはないが、アカマタ・クロマタと呼ばれる世持神、マヤぬ神（マユンガナシとも呼ぶ）には男女神がある。仲松弥秀によれば「宮良安彦氏の大川地区のものに、依りますと、クスマタハカは男神、ウリスクウフヌシ、それからハンナーハカは女の神ハンガニウフガン、フーガーハカハは名前は知らぬが、女の神、それから、ブンナーハカは男神サキバリアラウフヌシと男の神と女の神とちゃんと出てきます」（仲松・14頁⁽⁸⁴⁾）と男女神のことを紹介している。

鎌倉芳太郎が郷土史家宮良賢貞からの聞き取りメモによれば、波照間島の「アスク嶽は男女二神建ツ」とあり、「マトウリオワーは男、アラムトオワーは女」とある。⁽⁸⁵⁾アスクワーは阿底御嶽で、マトウリオワー（真徳御嶽）への遥拝所、アラムトオワー（新本御嶽）は白郎原御嶽への遥拝所である。真徳御嶽、白郎原御嶽は『琉球国由来記』にも記される古い御嶽である。これらには、神名、イビ名が記載されているが、残念ながら新本、阿底の記録はない。しかし、男女二神、男神、女神と神を宮古と同一文化圏にあった宮古・八重山では神名、イビ名と言わず、男女神とだけ呼称していた時代があったはずだ。宮島御嶽の神は男神である（宮島御嶽元司河野富氏談⁽⁸⁶⁾）。

仲松弥秀は「神名」について、別に神名・御嶽名をつける必要がなかった。『琉球国由来記』の神名や御嶽名を首里王府から上申するよう命じられ、各村落は困り、仕方なく当時の人々が、神の機

能・美称・御嶽内の地相・イベに接した植物岩石などによって神名としたのが『琉球国由来記』の神名であろうと推測している（仲松⁽⁸⁷⁾・59頁）。安良村のクバ御嶽や網取御嶽はユウナ御嶽と植物名で呼ばれている。仲松の神名は比嘉政夫が指摘するように「神そのものを直接指表すのではなく、神のよりつく場所や周辺の事物でもって間接的に表しているものと考えている」（比嘉⁽⁸⁸⁾・239頁）。眞境名安興は『琉球神道記』に国の風として、嶽嶽浦々の大石大樹皆御神に崇め奉るとあるのを例にし、「拝所は石垣をめぐらし、香炉を備え内部には大樹ありて殊に蒲葵、榕樹、等鬱蒼たり。此の拝所は琉球全島に亘り、到る所に存在して、夫々神名を有し、例へば「クバツカサ」（蒲葵司）或いは「マニツカサ」（クロツグツカサ）などと称セリ（略）」（眞境名⁽⁸⁹⁾・206頁）と述べている。八重山の御嶽の神名は盛や嵩、庭（広場）原、岬、谷間、泊、口（津口）、頂上（端）などがほとんどである。これからすると、八重山の神名は場所や地名などを指していると思われる。ちなみに、宮島御嶽の神名は神ヲレハナだが、ヲレはウリン（降りる）で、ハナは端処、尖端、崎、岬などの意である。神ヲリハナは「高いクバの樹」（柳田⁽⁹⁰⁾・90頁）の尖端あるいは端処から上り下りしているとツカサは述べている。宮島御嶽の神名は神が降りる場所を示している。

(11) イビ名

御嶽の最も奥のサンゴ石灰岩などの自然石（ご神体）をイビやイベという。宮島御嶽のイビは石垣尋常小学校が開校した当時、校庭中央に杜がありその中にイビがあった。校庭は凸状で学校の授業や行事に支障をきたしていた。「運動場は南北百米、東西に60米」（石小⁽⁹¹⁾・366頁）という状態であった。そのため、大浜孫伴校長は石垣字会と話し合いイビの移転を取り付けた。しかし、ツカサが反対し移転は難渋した。大浜校長は意を決し「雨風の強い嵐の日、蓑笠を着けてイビを抱えて遷座を強行した」（昭和56年イビ域結願祭執行経過記録⁽⁹²⁾）という。1933年の事と言われるが、1929年「運動場217坪5合拡張完成す」（石小⁽⁹³⁾・161頁）とあり、移転したのはご神体のイビ石ではなく、香爐だけの移転という話も含めて移転年代は検討が必要である。現在、イビは琉球石灰岩の石柱と平石の屋根の祠の中にある。イビには香爐が2基置かれている。イビはもともと、屋根つきの祠などなかったはずだが、人々に意識の変化によって、風雨にさらされるのを見かねて祠が築かれた。宮島御嶽も近現代に3回改築されている。イビについて宮島御嶽のツカサは「イビの定義は知らない。根付石が自然に生えて来た」（柳田⁽⁹⁴⁾・90頁）と述べ、田代安定は「神坐トシテ崇拝スル場所ハ往古有識者ノ墳墓、遺跡（略）神躰ハ多ク無形的ノモノニ属シ又石類ヲ以テスルアリ且神坐ノ周囲ニ「しめ」繩ヲ繞ラシ以テ霊場タルヲ別ツ」（柳田⁽⁹⁵⁾）と記している。『おもさうし』第七巻には「きみのつんじの節」「いべのいのりの節」があり、「きみのつんじ節」の威部の頭注には「威部はお嶽の神の在所」（外間⁽⁹⁶⁾・141頁）とある。

喜舎場永珣は神籬磐境（イワサカ）⁽⁹⁷⁾といい、鳥越憲三郎は「イビのイは神秘性・神聖の意味を持つ「斎」（接頭語）」「ビは我国の産霊神その他の神名に見る「ビ」で「神霊の意であろう」従って「イビ」とは「神霊」或は「神霊の在ます所の意であろう」と述べている（鳥越⁽⁹⁸⁾・468頁）。歴史家の仲原善忠は伊平屋ののだて言のゼルマに触れながら「人の亡霊があつめられている者、これを「イベ」と呼んでいる。」「霊所が成立し神聖な場所となれば、ここはセジあり所（後世は神の住居）として忌み避けるようになった。此の忌みの場所を後世イビと訛り威部と漢字をあててある」（仲原⁽⁹⁹⁾・62頁）と「忌み」説である。仲松弥秀は直接イビを指してはいないが、沖縄の古墳や御嶽がメヘ、ミヤーと

呼ばれているのは宮と考えられると述べ、「榎原宮、宇佐神宮の「宮」や神社も、その起源は「墓」ではなかろうか」(仲松・166頁)⁽¹⁰⁰⁾という。

伊波普猷は園比屋武御嶽の例をあげ、「かって、王者の屍をハフツた藪であったものが、後に石垣で囲まれて、神聖視されたのではないかと思っている。石垣で囲まれた琉球の杜或いはオガンと称するものゝ起源には、かういふ所もあったのであらう」(伊波・138頁)⁽¹⁰¹⁾と述べている。

田代の墳墓、仲松の御嶽の神は祖先神、墓、仲原の忌む、伊波の屍説にはそれぞれ差があるが、死者を祀る場所ということは共通している。八重山の遺跡からは多くの人骨が発掘されている。

岩陰、崖や洞窟を利用した墓、土壙周囲に石などを伴わない土壙墓、土壙の上部に石囲したものを石囲墓、礫などを配置した配石墓、床に琉球石灰岩礫を敷き詰め周囲に石積で埋葬域を設け、方状形にしたものを方形石組み墓が知られている(登野城遺跡・9~10頁)⁽¹⁰²⁾。

登野城遺跡からは、屋敷や敷地趾から人骨が多く発掘されており、それからすると、墳墓域という意識はなく、人々は死者の埋葬地と隣接して生活している。

仲松弥秀は八重山の、ある島で、戦後まで屋敷内部で祖先を葬っていた。仲松が臭かっただろうなと言うと、家人は「先祖の臭いがなんで臭いか。かえっていい臭いだ」(仲松・39頁)⁽¹⁰³⁾と答えたという。先祖との強い絆や血の繋がりを感じさせる。『琉球国由来記』の八重山の御嶽のイビ名は特殊な例を(国仲根所など)を除き、大アルジ、大主、ウヤン、玉、石、トノ、ゲライ、神本 照月、イラビ、ナルガネなどの役職や首長などの尊称がついている。なかには「根根春神本」のなんと読むのかわからない名称や下地島西御嶽のキンマモノなど、琉球最高の神職である聞得大君に憑依するキンマモン(君真物)がなぜ下地島西御嶽のイビとして祀られているのか不可解である。

宮鳥御嶽のイビ名は豊見タトライである。豊見(とよむ)は鳴り響く意で尊称である。タトライの意味は不明だが名称であろう。八重山のイビ名は未詳のものも多いが、人物や役職名称が多いと思われる。それからすると、イビは先祖を葬った忌む場所か標^{しるし}であろう。先祖の霊は葬られたイベの杜からクサデ(腰当)として子孫を守護し、子孫はそのために御嶽の神を先祖神として信仰しているといえる。

IV章 結論

宮鳥御嶽は石城山辺に居住していた人々が、海浜へ移動する途中、砂丘部を見下ろす琉球石灰岩からなる高台に居を構えた。その地の前方と後方の崖には水脈があり、生活する場所として適していた。やがて宮鳥御嶽が建立され、そこを中心に集落が発展した。ひとびとは、さらに南下し、海浜に隣接する砂丘部に定住し、琉球石灰岩の高台にある宮鳥御嶽を守護神のクサディ(腰当て)として発展して行き、やがて石垣島の中心地4か村を形成したと思われる。それは、4か字の「遺跡や貝塚は15世紀から16世紀に及ぶ共通点がある」(『石垣貝塚発掘調査報告書』3頁)⁽¹⁰⁴⁾という。マタネマシズ兄妹が住んでいた石城山遺跡は14~15世紀のもので、そこから宮鳥御嶽のある丘陵へ移動する途中にはピロースク遺跡やニラスク遺跡があり、村前方の砂丘部における集落の形成発展は14世紀後半から17世紀にかけてであろう。それは考古学的にもほぼ一致する。宮鳥御嶽の創建は14世紀末頃と考えられる。「御嶽の基本部はイビとイビの前とから構成されている」(鳥越・62頁)⁽¹⁰⁵⁾という時代

から、イビヌゾー、ナカマー、オンヤー、マー、鳥居と、時代によって御嶽は変遷し現代のような構造に整えられた。1614年の桃林寺や権現堂の創建によって御嶽の神と権現や寺の仁王像も神とする神仏混合が民衆に受容された。神仏混合は、それ以前に大和からの渡来人たちが、御嶽信仰（竹富島の波座間御嶽は屋久島より御渡、波レ若御嶽は徳島より御渡）に影響を与えたかもしれない。

宮島御嶽は、近現代になると人々の意識も変化し小学校建設のための聖域が分割され、一部には石垣村忠魂碑が建立された。御嶽には灯籠が寄進されたり、御嶽の入り口には、在郷軍人会石垣班が木製の鳥居をコンクリート製の鳥居に建て替えた。出征軍人の祈願も行われた。1939年神道調査のため八重山を訪れた糸永波上宮司は美崎御嶽で武運長久祈願のとき、ツカサに時代に順応して欲しいとして玉串奉奠等6項目の意見を述べたら一同喜んで賛成しているようであったと述べている⁽¹⁰⁶⁾（石垣市史「新聞資料集成Ⅳ」236頁）。国旗掲揚代も設置された。御嶽は宗教から政治への転換が図られ、オンヤーも神社風に変えている。

宮島御嶽の構造は変わらないように見えるが、ひとつひとつ検証していくと、時代によって確実に変化していることがわかる。

沖縄本島のように神名、イビ名がありながら表記が八重山では異なるのはなぜか、宮古のように男神、女神が伝えられながら『琉球国由来記』の八重山の御嶽にはなぜその表記がないのか。琉球王府は『琉球国由来記』作成のために書式（文案）を琉球の各間切に出したと思われるが、役人は、それにそって神名、イビ名を区別し記載したのだろうか。御嶽をひとつひとつ検討すると不可解なことが多い。結論は研究課題が多すぎるということである。

注

- (1) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書第二巻』「琉球国由来記」1988年。鳳文書館（『琉球国由来記』からの引用は本書による）。
- (2) 岩崎卓爾『岩崎卓爾一卷全集』1974年、97～109頁。伝統と現代社。
- (3) 八重山歴史編集委員会『八重山歴史』1954年、159～178頁。八重山歴史編集委員会。
- (4) 牧野清『八重山のお嶽』1990年、あーまん企画。
- (5) 波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』1999年、砂子屋書房。
- (6) 前掲書・注（1）『琉球国由来記』596頁。
- (7) 仲松弥秀「沖縄の聖地と葬所」『読谷村立歴史民俗資料館 館報 No. 3』1978年、41頁。読谷村立歴史民俗資料館。
- (8) 大浜永亘「石スク山遺跡の試掘調査」（1960・1962年の小調査概要）沖縄県教育庁文化課編集『沖縄県文化財調査報告書第15集石城山——緊急発掘調査概報』1978年、13頁。沖縄県教育委員会。
- (9) 島袋綾野「中世期・近世期における八重山諸島とその島嶼間ネットワーク」小林健太郎、長津一史 印東道子編著『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会——』2018年、244頁。昭和堂。
- (10) 島袋前掲書、注（9）243頁。
- (11) 島袋前掲書、注（9）244頁。
- (12) 石垣市教育委員会『石垣市文化財報告書32号登野城遺跡——ホテル建築に伴う緊急発掘調査 石垣市文化財発掘調査報告書第32号』2011年、9～10頁。石垣市教育委員会。
- (13) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編集『歴代宝案参考資料5『明朝実録』の琉球史料（一）和田久徳・池谷望子・内田晶子・高橋恭子 訳文篇』2005年、35頁。榕樹書林。
- (14) 球陽研究会編『球陽 読み下し編』2011年、199頁。角川書店（以後『球陽』からの引用は本書による）。

- る)。
- (15) 石垣市総務部市史編集室編集『石垣市史叢書1『慶来慶田城由来記』1991年、9頁。石垣市役所。
 - (16) 「八重山島大阿母由来記」編集発行者野田裕康『南島 第1輯』再販 1976年、21頁。東京・八重山文化研究会(東京・八重山文化研究会再販より)。
 - (17) 『八重山島嶽由来記』琉球大学宮良殿内文庫。
 - (18) 前掲書・注(1)『琉球国由来記』601~602頁。
 - (19) 牧野前掲書・注(4)『八重山の御嶽』132頁。
 - (20) 大田ミチ・桃原文・後盛マアチ・福仲俊夫氏談。
 - (21) 宮良當壯『宮良當壯全集8 八重山語彙』1980年、605頁。第一書房。
 - (22) 宮良前掲書・注(21)408頁。
 - (23) 宮良前掲書・注(21)226頁。
 - (24) 前掲書注(1)『琉球国由来記』「宮島御嶽」「美崎御嶽」『琉球国由来記』596~597頁。
 - (25) 石垣市総務部市史編集室編集『石垣市叢書12 大波之時各村之形行書・大波寄揚候第』1998年、19頁。石垣市。
 - (26) 石垣市『「八重山古地図展」——手描きによる明治期の村絵図——』7頁~11頁。沖縄県立博物館蔵。
 - (27) 「大地方村々御嶽并威部名調査」『届進達報告綴』八重山島役所 石垣市立八重山博物館。
 - (28) 石垣小学校創立百周年記念事業期成会『石垣小学校百年誌』1982年、52頁。南西印刷。
 - (29) 前掲書・注(28)『石垣小学校百年誌』宮良高司「母校の思い出」368~369頁。
 - (30) 前掲書・注(28)『石垣小学校百年誌』155頁。南西印刷。
 - (31) 牧野前掲書・注(4)130頁。
 - (32) 石垣市立八重山博物館蔵『大川村の資料』(仮名)。
 - (33) 南島研究会編『柳田國男先生稿 南島旅行見聞記』私家版。1975年、89頁(以下『南島旅行見聞記』からの引用は本書による)。
 - (34) 『八重山新報』1936年4月3日号石垣市立図書館蔵。
 - (35) 波照間前掲書・注(5)27~28頁。
 - (36) 『球陽外卷 遺老説傳』1978年、102頁。角川書店。
 - (37) 「幕府撰元禄琉球八重山絵図」国立国会図書館デジタルアーカイブインターネット検索。
 - (38) 前掲書・注(24)石垣市総務部市史編集室編集『石垣市叢書12 大波之時各村之形行書・大波寄揚候第』14頁。
 - (39) 安積鋭二訳「サー・エドワード・ベルチャー・サマラン号の八重山来航記」東京・八重山文化研究会編『八重山文化』第5号1977年、31頁。ラブ・オーシュリ/上原正稔「御嶽入り口の門」『青い目が見た大琉球』1987年、60頁。ニライ社。
 - (40) 前掲書・注(25)『八重山古地図展』7頁。
 - (41) 国立臺灣大学図書館数位典藏館田代文庫『諸神社并風俗見取図』インターネット検索。
 - (42) 石垣市立八重山博物館『開館二十周年記念 八重山蔵元絵師画稿集』1993年、22頁。石垣市立八重山博物館。
 - (43) 田代安定「八重山群島住民ノ言語及ヒ宗教」『東京人類学会雑誌九十六号』1894年、231頁。国立国立臺灣大学図書館数位典藏館田代文庫蔵インターネット検索。
 - (44) 石垣市立八重山博物館1988『収藏品目録 絵が語る明治の八重山』1988年、1頁及び6頁。石垣市立八重山博物館。
 - (45) 西郷信綱・外間守善校注『日本思想大系18 おもろさうし』1981年、28頁。岩波書店。
 - (46) 池宮正治『琉球古語辞典混効験集の研究』1995年、150頁。第一書房。
 - (47) 谷川健一『日本の神々』1999年、16頁。岩波書店。
 - (48) 谷川前掲書・注(47)14頁。

- (49) 前掲書・注(15)『石垣市叢書1 慶来慶田城由来記』5~6頁。
- (50) 前掲書・注(14)球陽研究会『球陽』(読み下し)』144頁。
- (51) 牧野前掲書・注(4)20頁。
- (52) 谷川前掲書・注(44)24頁。
- (53) 石垣市教育委員会文化財調査報告第31号『石垣貝塚発掘調査報告書』2009年。石垣市教育委員会。同第32号『登野城遺跡』2011年。石垣市教育委員会。
- (54) 仲松弥秀『神と村』58~59頁。伝統と現代社。
- (55) 伊波普猷「南島古代の葬制」大藤時彦・小川徹編者『沖縄文化論叢2 民俗編I』1971年、136~138頁。平凡社。
- (56) 伊波前掲書・注(55)135頁。
- (57) 竹富町史編集委員会『竹富町史第7巻 波照間島』2018年、446頁。竹富町役場。
- (58) 沖縄県沖縄史料編集所「八重山島年来記」『沖縄県史料・前近代1 首里王府仕置』1981年、289頁。沖縄県教育委員会。
- (59) 前掲書・注(42)『開館二十周年記念八重山蔵元絵師画稿集』所収「御嶽詣の図」22頁。
- (60) 前掲書・注(40)『諸神社并風俗見取図』。国立臺灣大学図書館數位典藏館田代文庫。
- (61) 前掲書・注(25)『八重山古地図展』——手描きによる明治期の村絵図——』33頁。
- (62) 前掲書・注(57)『竹富町史第7巻 波照間島』168頁。
- (63) 「大地方村々御嶽并威部名調査」『届進達報告綴』八重山島役所 石垣市立八重山博物館蔵。
- (64) 牧野前掲書・注(4)130頁。
- (65) 『八重山新報』(1922年11月12月2日号) 石垣市立図書館蔵。
- (66) 豊見本長伸氏談2019年4月。
- (67) 前掲書・注(57)『竹富町史第7巻 波照間島』447頁。
- (68) 折口信夫記念古代研究所編纂折口信夫「女の香爐」『折口信夫全集第十六巻』1997年、85頁。中央公論社。
- (69) 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子『李朝実録 琉球史料集成【訳注篇】』2005年、236~237頁。榕樹書林。
- (70) 前掲書・注(12)石垣市教育委員会『石垣市文化財報告書32号登野城遺跡——ホテル建設に伴う緊急発掘調査報告書』23頁。
- (71) 前掲書・注(1)『琉球国由来記四巻四』135頁。
- (72) 藤田長信氏談。
- (73) 前掲書・注(32)『柳田國男先生稿 南島見聞記』72頁。
- (74) 「八重山新報」1922年11月12月11日 石垣市立図書館蔵。
- (75) 宮島御嶽司河野富氏談。1999年6月。
- (76) 田辺泰『琉球建築』1972年、座右宝刊行会。
- (77) 田代安定「琉球西表嶋古見ノ土器」『東京人類學會雜誌四十號』1889年、413頁。国立臺灣大学図書館數位典藏館田代文庫インターネット検索。
- (78) 喜舎場永珣ノート「八重山の神祇」石垣市立八重山博物館。
- (79) 前掲書・注(20)「八重山語彙」312頁。第一書房。
- (80) 前掲書・注(45)外間守善・西郷信綱校注『おもろさうし』56頁。
- (81) 前掲書・注(20)「八重山語彙」231頁。第一書房。
- (82) 前掲書・注(7)仲松「沖縄の聖地と葬所」39頁。
- (83) 前掲書・注(44)谷川『日本の神々』35頁。
- (84) 仲松弥秀「八重山文化の諸問題」仲松弥秀先生ファンクラブの集い発行 1996年、14頁。沖縄県立図書館蔵。
- (85) 沖縄県立芸術大学付属研究所編集発行『鎌倉芳太郎資料編(ノート篇)第2巻民俗・宗教』2006年、

177 頁。

- (86) 宮島御嶽司河野富氏談。
- (87) 仲松前掲書・注(51)『神と村』1975年、59～60頁。
- (88) 比嘉政夫著『沖縄の門中と村落祭祀』1983年、246頁。三一書房。
- (89) 真境名安興著『真境名安興全集第1巻』1993年、206頁。琉球新報社。
- (90) 前掲書・注(32)『柳田國男先生稿 南島旅行見聞記』90頁。
- (91) 前掲書・注(28)『石垣小学校百年誌』桃原用永「思い出はつきぬ」366頁。
- (92) 『昭和56年イビ域結願祭執行経過記録』石垣字会所蔵。
- (93) 前掲書・注(28)『石垣小学校百年誌』161頁。
- (94) 前掲書・注(32)『柳田國男先生稿 南島旅行見聞記』90頁。
- (95) 田代前掲書・注(42)「八重山群島住民ノ言語及ビ宗教」231頁。
- (96) 外間・西郷前掲書・注(72)『おもろさうし』141頁。
- (97) 喜舎場永珣『新訂増補八重山歴史』1975年、161頁。国書刊行会。
- (98) 鳥越憲三郎『琉球宗教史の研究』1965年、468頁。角川書店。
- (99) 仲原善忠「セジ(靈力)の信仰について」『仲原善忠全集第3巻』1978年、296頁。沖縄タイムス社。
- (100) 仲松弥秀「テラとミャー」大藤時彦・小川徹編者『沖縄文化論叢2 民俗編I』1972年、166頁。平凡社。
- (101) 伊波前掲書・注(52)「南島古代の葬制」138頁。
- (102) 前掲書・注(12)石垣市教育委員会『石垣市文化財報告書32号登野城遺跡——ホテル建設に伴う緊急発掘調査報告書』9～10頁。石垣教育委員会。
- (103) 仲松前掲書・注(7)「沖縄の聖地と葬所」39頁。
- (104) 前掲書・注(50)『石垣貝塚発掘調査報告書』3頁。
- (105) 鳥越前掲書・注(86)『琉球宗教史の研究』62頁。
- (106) 石垣市総務部市史編集室編集『石垣市史資料編近代7 新聞資料集成IV』1991年、236頁。石垣市役所。